

令和8年2月20日

## 令和7年度日本芸術院会員候補者の決定について

日本芸術院（院長 野村萬）は、芸術上の功績顕著な芸術家7名を、日本芸術院会員候補者として決定しましたので、お知らせします。

## 1. 日本芸術院会員候補者の決定

日本芸術院は、令和7年9月上旬、10月中旬に開催した会員候補者推薦委員会、及び10月下旬に開催した各部の会員候補者選考委員会にて選考の上、会員による投票を経て会員候補者を内定し、会員総会の承認を経て令和8年2月6日に7名を日本芸術院会員候補者として決定し、同日付けで日本芸術院長から文部科学大臣に上申しました。

令和8年3月1日付けをもって文部科学大臣から発令の予定です。

## 2. 文部科学大臣に上申した会員候補者（略歴・賞歴（本人確認済）等は別添資料を御覧ください。）

## 【第一部（美術）】

第一分科	（絵 画）	<small>おお や のり</small> 大矢 紀
第一分科	（絵 画）	<small>こなだ いっき</small> 小灘 一紀（本名：小灘 一紀）
第三分科	（工 芸）	<small>み た むら ありすみ</small> 三田村 有純

## 【第二部（文芸）】

第七分科	（小説・戯曲）	<small>かわかみ ひろみ</small> 川上 弘美
第九分科	（評論・翻訳）	<small>つじ のぶお</small> 辻 惟雄

## 【第三部（音楽・演劇・舞踊）】

第十三分科	（文 楽）	<small>よしだ たまお</small> 吉田 玉男（本名：大西 彰）
第十四分科	（邦 楽）	<small>みやこ いちゅう</small> 都 一中（本名：藤堂 誠一郎）

※各部の分科順、雅号・筆名・芸名の五十音順で記載しています。

## &lt;担当&gt;

日本芸術院

事務長 植垣 健一

庶務係長 鈴木 啓太

庶務係員 山口 紗希

電 話 03-3821-7191

絵画

おお や のり  
大 矢 紀



### 推薦理由

大矢紀氏は少年の頃に画家の父と長岡市から上京し、絵に励み、院展で70年間活躍している新潟出身の画家である。厳しい北国の生活体験があるので、新潟や北海道の迫力ある雪山や火山などを圧倒的な存在感と迫力で描く一方、優しく美しい花々を描いた作品からは安らぎや慈しみの心が感じられ、どちらも大矢氏の内面を表現している。現代の風潮に抗い、真摯に写生にこだわっている。「一木一草に神宿る」の精神に基づき、山や木や花を含む生命を直向きに描き、その創作意欲は益々漲っている。

### 【略歴】

昭和11年3月11日 新潟県生まれ 89歳  
昭和30年 日本美術院展初出品初入選  
平成10年 日本美術院同人(同12年評議員同23年まで、同29年評議員、令和6年理事現在まで)  
平成12年 新潟県長岡市名誉市民  
平成30年 川崎市文化大使(現在まで)

### 【賞歴】

昭和51年 再興院展日本美術院賞・大観賞  
昭和54年 紺綬褒章(後7回)  
昭和59年 日本美術院奨学金(前田青邨賞)  
平成11年 新潟日報文化賞  
平成17年 再興院展文部科学大臣賞  
平成20年 再興院展内閣総理大臣賞  
令和2年 神奈川文化賞  
令和6年 日本芸術院賞

絵画

こ なた いっ き  
小 灘 一 紀  
(本名 こなた かずのり  
小灘 一紀)



#### 推薦理由

小灘一紀氏は出雲神話の伝承地である鳥取県で生まれた。長年にわたって「古事記」を題材にして古代人の魂と触れ合う中でそれを絵画化してきた異色の画家である。欧米から様々な価値観が流入する中で、日本古来の神話などが埋もれてしまうようなときもあったが、そんな時流に反して小灘氏は25年前から古事記を絵画化することに取り組んでいる。日本人の霊性は何かということを見いだしている。古代人のカオスを芸術的表現で表し、一昨年の池田二十世紀美術館で個展が開催されたように国内の美術館などにもその描写力は高く評価されている。青木繁の神話絵画以来の貴重な存在といえる。

#### 【略歴】

昭和19年 鳥取県生まれ 81歳  
昭和42年 金沢市立美術工芸大学卒業  
平成16年 日展評議員（令和2年理事現在まで）  
平成18年 大阪芸術大学客員教授（平成27年まで）  
平成20年 堺美術協会会長（平成29年まで）  
平成22年 日洋会理事（同30年理事長現在まで）  
令和6年 ねんりんピック（鳥取大会）洋画審査員

#### 【賞歴】

平成4年 日展特選（後1回）  
平成14年 日展日展会員賞  
平成28年 大阪府憲法記念日知事表彰  
平成29年 堺市功労者表彰  
平成29年 日展内閣総理大臣賞  
令和5年 日本芸術院賞

工芸

み た むら あり すみ  
三 田 村 有 純



撮影 島崎真二郎

### 推薦理由

三田村有純氏は、江戸蒔絵の名門の家系を受け継ぎ、その伝統的な漆芸の表現技術を伝承しながら、漆素材による独自の新しい立体造形を基に、宇宙をテーマにした画期的なオブジェを逸早く日展や国際展に発表、平成29年度には日本芸術院賞を受賞した。また、東京藝術大学在任中よりヨーロッパ諸国、中国はじめ東南アジア方面に漆芸の啓蒙普及を志し、「漆の林」の植栽事業など様々なパフォーマンスを展開、今やその成果は顕著なものとなり国際的な評価は高い。一方、工芸美術に関する著作活動も旺盛で、世界に冠たる漆芸界の先導者として期待されるどころ大である。

### 【略歴】

- 昭和24年11月18日 東京都生まれ 76歳
- 昭和45年 江戸蒔絵赤塚派八代目祖父自芳、九代目父秀雄より蒔絵技法を学ぶ
- 昭和50年 東京藝術大学大学院美術研究科漆芸専攻修了（同51年田口善国研究室、同53年高橋節郎研究生修了）
- 平成10年 ベルギーHIFA 王立美術大学院客員研究員として一年間在外研究
- 平成16年 東京藝術大学美術学部教授（同22年アートプラザ所長、同23年学長特別補佐、同24年学長特命、同29年参与令和4年まで、同29年名誉教授現在まで）
- 平成29年 全国漆器展審査委員長（現在まで）
- 令和3年 国際公募展「日本和文化グランプリ」審査委員長（現在まで）

### 【賞歴】

- 平成9年 日本航空協会「空の日」芸術賞
- 平成25年 日本現代工芸美術展内閣総理大臣賞
- 平成28年 日展内閣総理大臣賞
- 平成30年 日本芸術院賞
- 令和元年 紺綬褒章
- 令和5年 東京国際漆芸術交流展国際漆文化交流賞（榮譽証書）

小説・戯曲

かわ かみ ひろ み  
川 上 弘 美



©講談社 森清

### 推薦理由

川上弘美氏は、デビュー作『神様』（平成6年）以来、現在に至るまで、常に第一線で旺盛な作家活動を展開している。その幻想的で、質の高い作品群には目を瞠るものがある。それらは、日本語と日本文学の表現力の可能性を高め、拡大するものである。このことは、国内の名立たるほぼ全ての文学賞の受賞歴、さらに英語等の外国語に翻訳され、国際的な文学賞に幾つもの作品がノミネートされていることから明らかである。今回、川上氏を日本芸術院会員として迎えることは、日本芸術院、ひいては我国芸術界全般の充実と発展に大きく貢献するものと確信する。

### 【略歴】

昭和33年4月1日 東京都生まれ 67歳  
昭和55年 お茶の水女子大学理学部生物学科卒業  
平成18年 谷崎潤一郎賞選考委員（現在まで）  
平成19年 芥川龍之介賞選考委員（現在まで）

### 【賞歴】

平成 8年 芥川龍之介賞  
平成13年 谷崎潤一郎賞  
平成19年 芸術選奨文部科学大臣賞  
平成27年 読売文学賞小説賞  
平成28年 泉鏡花文学賞  
令和 元年 紫綬褒章  
令和 5年 フランス芸術文化勲章オフィシエ  
令和 5年 野間文芸賞  
令和 7年 恩賜賞・日本芸術院賞

評論・翻訳

つじ のぶ お  
辻 惟 雄



#### 推薦理由

若き日の辻惟雄氏が、『奇想の系譜』によって岩佐又兵衛や伊藤若冲ら特異な魅力を有する江戸時代の絵師たちを再評価し、日本の近世絵画史を大きく書き換えたのは、衝撃的かつ画期的な貢献であった。その後、日本美術史を牽引する研究者として、「かざり」「あそび」「アニミズム」など従来とは異なる視点から日本美術の見方を刷新し、柔軟性と幅広さをもたらした功績は計り知れない。旺盛な執筆活動の成果は『辻惟雄集』（全6巻）にまとめられている。

#### 【略歴】

昭和7年6月22日 愛知県生まれ 93歳  
昭和32年 東京大学文学部美術史学科卒業（同34年大学院人文科学研究科美学美術史学修士課程修了）  
昭和46年 東北大学助教授（同50年教授同56年まで）  
昭和56年 東京大学文学部教授（平成5年名誉教授現在まで）  
平成7年 千葉市美術館館長（同11年まで）  
平成11年 多摩美術大学学長（同15年まで）  
平成17年 MIHO MUSEUM館長（同28年まで、同28年顧問現在まで）

#### 【賞歴】

平成22年 京都市文化功労者表彰  
平成28年 文化功労者  
平成29年 朝日賞  
平成30年 瑞宝重光章  
令和2年 日本学賞  
令和7年 文化勲章

文楽

よし だ たま お  
吉 田 玉 男

(本名 おおにし あきら  
大西 彰)



撮影 滝澤めぐみ

### 推薦理由

吉田玉男氏は、名人の誉高かった初代吉田玉男の薫陶を受け、その芸を継承。品格のある精神性の高い演技で文楽の代表的な立役の数々を勤め、文楽の芸術性を高めている。なかでも、『仮名手本忠臣蔵』の大星由良助をはじめとする時代物の主人公では、風格と骨太の存在感に肚を感じさせる演技で、人間の本質的な苦悩や葛藤に迫る迫力ある舞台を作り上げる。一方で、弟子や後進の指導にも力を注ぎ、日本の伝統芸能の振興発展に多大な貢献をしている。現代の文楽を代表する人形遣いのひとりである。

### 【略歴】

昭和28年10月6日 大阪府生まれ 72歳  
昭和43年 八尾市立八尾中学校卒業  
昭和43年 初代吉田玉男に入門、玉女と名乗る  
昭和44年 朝日座「菅原伝授手習鑑」菅秀才役で初舞台  
昭和62年 重要無形文化財「人形浄瑠璃文楽」（総合認定）保持者  
平成14年 国立劇場養成所文楽研修講師（現在まで）  
平成27年 二代目吉田玉男襲名  
令和5年 重要無形文化財「人形浄瑠璃文楽人形」（各個認定）保持者

### 【賞歴】

平成24年 伝統文化ポニー賞優秀賞  
平成26年 日本芸術院賞  
平成26年 八尾市文化賞  
令和2年 紫綬褒章  
令和5年 松尾芸能賞優秀賞

邦楽

みやこ いっ ちゅう  
都 一 中

(本名 とうどう せいいちろう  
藤堂 誠一郎)



©岡本隆史

#### 推薦理由

一中節は日本伝統音楽の源として、後に続く三味線音楽のみならず、邦楽全般に多大な影響をもたらしている。都一中氏は十二世の同派の代表として同流の技芸向上・拡大・諸方面への紹介につとめ、特に海外へ向けた積極的かつ地道な活動は評価に値する。後進の指導にも力を注ぎ、定期的に演奏会・講演会を開催して演奏家の育成に努めている。都氏の実行力、技芸の力とその充実、また誠実な人柄は日本芸術院会員としての確実な活動が期待できるものである。

#### 【略歴】

昭和27年12月23日 東京都生まれ 73歳  
昭和31年 父初世常磐津文字蔵に師事  
昭和44年 四世常磐津文字兵衛（英寿）に師事  
昭和49年 十一世都一中に師事  
昭和56年 二世常磐津文字蔵襲名  
昭和57年 都斎中の名を許される  
平成4年 十二世都一中を襲名し披露演奏会を主催  
平成11年 重要無形文化財「一中節」（総合認定）保持者  
平成20年 重要無形文化財「常磐津節」（総合認定）保持者  
令和5年 重要無形文化財「日本舞踊」（総合認定）保持者

#### 【賞歴】

昭和60年 文化庁芸術作品賞  
平成2年 清栄会奨励賞  
平成27年 日本芸術院賞

## 日本芸術院について

### 1. 設置目的

日本芸術院は、美術、文芸、音楽、演劇、舞踊等芸術各分野の優れた芸術家を優遇するために設けられた栄誉機関として設置。

### 2. 設置根拠及び沿革

(1) 文部科学省設置法第32条、日本芸術院令

(2) 大正8年、帝国美術院として発足。

昭和12年、文芸、芸能の2部門を加え帝国芸術院に改組、拡充。

昭和22年、日本芸術院に名称変更し、現在に至っている。

### 3. 組織

日本芸術院は、院長1名と会員（終身）120名以内で構成され、会則により3部18分科に分かれ所属し、本院の設置目的を達するため必要な事業を行う。

院長は、芸術に関し卓越した識見を有する者について、会員の選挙によって選ばれ文部科学大臣により任命される。

会員は、芸術上の功績顕著な芸術家について、会員からなる部会の推薦（部会における選挙）と総会の承認によって選ばれ、文部科学大臣により任命される。

(令和8年2月1日現在)

院長 野村 萬	第一部（美術）……………現員 48名 部長 奥田 小由女
	第二部（文芸）……………現員 27名 部長 辻原 登
	第三部（音楽、演劇、舞踊）…現員 37名 部長 堤 剛
	事務長————— 庶務係

〔定員 計 120名（現員112名）〕

### 4. 主な事業

① 芸術の発達に寄与する活動を行うとともに、芸術に関する重要事項を審議し、これに関し文部科学大臣又は文化庁長官に意見を述べることができる。

② 会員以外の者で、卓越した芸術作品と認められるものを制作した者及び芸術の進歩に貢献する顕著な業績があると認められる者に対して、毎年、恩賜賞と日本芸術院賞を授与している。

③ 前記の他、所蔵作品の公開展示（無料）、日本芸術院賞受賞作品展（無料）、会員による講演会等の開催（無料）、日本芸術院会員記録の制作、日本芸術院の活動記録作製等を行っている。

### 5. 予算額

令和8年度予算案額 556百万円（うち会員年金303百万円）

令和7年度 528百万円（うち会員年金303百万円）